

湯原温泉

ホットドック ミニ体験記

植村 誠

九月某日、齢四十一にしてはじめて人間ドックなるものを体験してきました。いちおうは常人として十年ほどの会社勤めをしたので、そのころは定期的な健康診断の類を受けることができたけれど、フリーランス（早い話が無職と紙一重なんだな、これが）になつてからはまさに自己任せで、それなのに昨年末にひよんなことから血液検査をしたもらった医者に「尿酸値が高い」だの「コレステロールが高めですね」などと宣告される始末で、「こりや、大ごとになる前にいちどぐらいは診てもらえるほうがいいゾ」と思つてはいたのに、生来ののん気さからずつとそのままになつていたのでした。

そんな状況ではあつたが、このところ積極的な気持ちで受けてみたいドックの存在があつて日増しにそそられてきてはいた。温泉観光とドックとを

コラボレートした、その名も「ホットドック」(ドックにあらず)である。

美作は湯原温泉で二年前より取り組まれているというこのドックは、簡単にいえば湯原温泉の宿で一夜の宴を楽しみ、ただしその前に健康診断を受けて心身ともにスッキリしましようというものである。湯原温泉は以前から気になつていた温泉地なので、健康のためと理由をこじつけつつ訪れるのも悪くはないが、それよりもなにも実際に受診する気になせされたのは、旅行作家の会の御大・野口冬人氏がホットドックによつて一命を取り留めたという事実による。

すでにご本人が公表されていることなのでここに書いても差し支えはないと思うが、昨年(〇五年)の夏に取材を兼ねてホットドックを受けたところ大腸ガンを患っていることが発覚、

手術・療養の末、いまではとても大病を隠し持っていたとは思えないほどのご健在ぶりなのだ、私のほうはといえば、こゝ数年はこれといった検診を受けていかなかったこともあり、こゝいらでいちどぐらいいは調べてもらわないかとと厄介なことになるのでないかといささかビビらされたのであつた。そのチャンスは意外と早くめぐつてきた。今号の『旅行作家』で特集している岡山県のDCである。

個人的なテーマは県内のローカル線めぐり。当然、湯原温泉の玄関口・中国勝山を通る。しからば湯原温泉を訪問するのはあたりまえというもので、そうならばホットドックを受けるべしと言われているようなものだ。

そこで、さつそくプチホテル・ゆばらリゾートの古林伸美氏をとおしてホットドックの申し込みとあいなつたのである。

検査の流れを簡単に説明しよう。

一週間前までに旅館組合に申し込みを済ませ、当日は十三時までに病院の窓口にチェックイン。それで問診から各種血液検査、血圧、視力・聴力検査、心電図、胸部レントゲンを受



湯原温泉病院

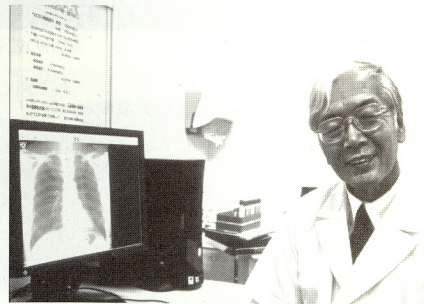
一なので簡単にしか記せないが、畏縮性胃炎というガンの芽を調べるものだという。血液検査なので、ふつうなら前夜から制限される食事も、ホットドックでは当日の十時以降の飲食を控えるだけで済み、受診者の苦痛がより軽減されることとなつた。さらに結果が出るまでの待ち時間には、湯原温泉の温泉指南役による効果的な入浴法などの説明が受けられるという仕組みだももちろん、内臓のエコーなど各種オプションも用意されている。

この日は受診したのが自分だけというところもあり、所要時間はわずか十五分ほど。初体験のドックにしてはなんとまああつけないけれど、「まるつきり問題はありませぬ。優等生です！」

という湯原温泉病院の川上俊爾(としじ)院長直々にお墨つきをいただいたのは気分がスッキリするということもだ。こゝいうわけで、懸案であつた健康問題はとりあえず無事に乗り切つた。もちろん油断はできないが、湯原温泉病院では受診者のデータを電算化しており、毎年リピートすることによりより詳しい健康管理ができるの

であつた。来年以降も訪れてみたいものである。ちなみにちよつと蛇足をすると、受診前夜はふだんどおりに過さずほうがいい。旅行作家の会でいえば、美貌のマダムSさんあたりはきちんと酒を飲んでおかなければならない。「わつ。ドックを受けるからといって、どういふわけか前の晩から摂生しちゃうひとが多いんですよ。これはふだんどおりのコンディションで受けなければ意味は軽減されちゃいます」とは川上院長のアドバイスである。

け、十五時ごろには検診結果の説明を医師から受けるというものだ。こゝでドックの経験者は胃の検診がないことに気づかれたと思うが、ホットドックでは一般に行なわれているレントゲンによる胃検診を廃し、ペプシノーゲン法という血液検査を取り入れているのである。この検査は従来のようにバリウムを飲んだうえにあつて下剤の効果を楽しむこともなく、胃ガンの初期徴候を発見することができるというもの。シロウトが受けたレクチャ



川上俊爾先生